

(様式 1-2)

I 学校の概要

明日も行きたくなる学校づくりプロジェクト事業

さぬき市立さぬき南小学校

◆児童生徒数及び教員数

○児童生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全校
1学級 18名	1学級 19名	1学級 22名	1学級 19名	1学級 30名	1学級 21名	3学級 11名	9学級 140名

○教員数16名

◆学校の特色

本校は、学校教育目標「自他を思いよりよく生きようとする子どもの育成」を掲げ、「明日も行きたくなる学校 自立した学習者・生き方を育てる学校 地域も学校」をサブテーマに、教育活動を推進している。

本校の児童は素直で明るく、活動の目的が明確であれば、前向きに取り組む姿が多く見られる。休み時間には、友だちと誘い合って元気に遊ぶ様子が見られる一方で、遊びのルールを守れなかったり、自分の思いをうまく言葉で表現できなかつたりすることから、トラブルにつながる場面も少なくない。

こうした実態を踏まえ、令和7年度は、互いに認め合い、高め合う学級集団の形成をめざし、自分の思いや考えを主体的に表現できる場の設定について研究を進めてきた。

令和8年度は、人と人とのつながりの中で、自分も他の人も尊敬できる心を育むことを教育活動の中心に据え、「絆づくり」と「居場所づくり」の取組を一層推進する。児童一人一人が安心して学校生活を送ることができる環境や体制づくりに継続して取り組んでいきたい。

II 研究主題等

研究主題

互いに認め合い、ともに学び合う子どもの育成

～自分の思いや考えを主体的に表現し、互いの考えを認め合うことができる子どもの姿をめざして～

◆研究主題設定の理由

本校児童は、「自分にはよいところがある」「自分のことがすきだ」といった項目において肯定的な回答が高く、自己肯定感や自尊感情は一定程度育まれていると言える。一方で、「やればできるという気持ちで何にでも挑戦している」や「授業中、進んで発表している」といった項目では肯定的な回答が伸び悩んでおり、失敗を恐れずに挑戦する態度や、自分の思いや考えを主体的に表現する力に課題が見られる。また、授業を楽しんでいる児童の割合は増加傾向にあるものの、すべての児童が主体的に学びに向かっているとは言い切れず、学習への意欲や思考・表現力のさらなる底上げが求められている。

昨年度の研究では、「人権が尊重される授業づくりの視点」を意識した実践を通して、安心して自分の考えを表現できる学習環境が、児童の学習意欲の向上や、互いの考えを大切にしようとする態度の育成に有効であることが明らかになった。しかし、学習状況調査や質問紙調査の結果からは、課題に対して自分で考え、主体的に取り組む力や、根拠をもって考えを表現する力について、引き続き課題が残されていることが分かる。

これらの実態を踏まえ、児童一人ひとりが学級の中で受け入れられ、安心して自分の思いや考えを表現できる学級集団を基盤としながら、対話や交流を通して互いに認め合い、ともに学び合う学習の充実を図ることが重要である。その中で、学びを深めながら粘り強く課題に取り組み、主体的に表現できる子どもの育成をめざ

し、本研究主題を設定した。

◆研究内容及び方法

①いじめ等のない安心して学べる学校づくり

- ・ いじめの定義について全教職員で共通理解を図るとともに、学級指導や道徳科等を通して児童にも分かりやすく伝え、未然防止の意識を高める。
- ・ 週1回の生徒指導委員会を継続し、気になる児童や行動について早期に把握するとともに、全教職員で情報共有を行い、組織的かつ継続的な共通実践につなげる。
- ・ 日常の教育活動において、温かい言葉掛けや認め合う場面を意図的に設け、安心して過ごせる学校風土の醸成に努める。
- ・ 学習参観では全学年が道徳科の授業を公開し、児童の心の教育を推進するとともに、いじめ防止に対する学校の取組について保護者と共有し、家庭との連携を図る。

②心の小さなSOSの早期発見・早期対応

- ・ 年2回実施する「心といじめについてのアンケート」や「先生と話そう週間」を通して、児童一人ひとりの思いや悩みに丁寧に寄り添い、いじめや不安の早期発見、早期対応に努める。
- ・ アンケート結果や日常の様子を踏まえ、担任を中心に迅速な対応を行うとともに、必要に応じて関係職員で情報共有を行う。
- ・ SC、SSW、心の教室相談員等の専門機関と連携し、継続的な見守りや支援が必要な児童についてはケース会議を実施するなど、組織的な支援体制を整える。

③児童生徒が不登校とならない、児童生徒にとって魅力ある学校づくり

- ・ 児童一人ひとりが学習に主体的に取り組み、「分かる」「できる」という達成感を実感したり、学ぶ楽しさを感じたりできるよう、授業内容や指導方法を工夫する。
- ・ 互いに認め高め合う活動として、「なかよしタイム」や「あつまれすきなことの森」を継続的に実施し、異学年や友だちとの関わりを通して自己効力感（自分はやればできるという感覚）を高め、尊敬や感謝の心を育てる。
- ・ 体力づくりの活動を計画的に推進し、児童が自己目標を設定してあきらめずにチャレンジする経験を積み重ねることで、自己有用感（自分は誰かの役に立っているという感覚）や達成感を高め、学校生活への意欲向上につなげる。

III 成果の評価計画（検証方法）

- ・ 児童アンケート「自分をみつめてみよう」の結果や、日々の学習や学校生活における児童の活動状況をもとに、自己肯定感（自分はこれでいいと思える感覚）や主体性、学級・学校の雰囲気の変化など、取組の成果を多面的に見取る。
- ・ 生徒指導に関する問題行動等の月別状況調査を分析し、件数や内容の推移から、取組の達成状況や成果を把握するとともに、今後の指導に生かすべき課題について考察する。
- ・ 保護者アンケートや学校評価を実施し、家庭や地域の視点から本校の教育活動に対する評価や意見を収集することで、成果を確認するとともに、改善点を明確にし、次年度の取組につなげる。

IV 研究成果の普及方法

- ・ 「香川の教育づくり発表会」で、取組の内容や成果を発表する。
- ・ 学習参観や学校行事、学校だより等で、保護者や地域の方に活動の様子を公開する。